

絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践

～「みんなで作ろう！ホットケーキ！」～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

梅野歩未・浦美沙咲・川原涼・久保田煌梨・
佐藤愛奈・末次優花・田島万那佳・中川朱里・
西田和香・沼田桃花・林春日・森尾美妃・
吉野内胡光・渡辺歩果

1. 実践の概要

題材とした絵本：『ぐりとぐら』

文：中川李枝子 絵：大村百合子 出版：福音館書店（第1刷）

実践のタイトル：「ホットケーキ作り」

実践準備の担当：総合責任者（西田和香）、脚本（森尾美妃、渡辺歩果）、大道具（佐藤愛奈、沼田桃花、末次優花、林春日、田島万那佳、久保田煌梨、川原涼）、衣装（浦美沙咲、中川朱里、吉野内胡光）、音楽（渡辺歩果）

実践時の担当：ぐり（梅野歩未）、ぐら（末次優花）、うさぎ（森尾美妃、吉野内胡光）、きつね（佐藤愛奈、沼田桃花）、くま（中川朱里、西田和香）、たまごのみみ（浦美沙咲）、ナレーション（林春日）、音・演奏（渡辺歩果）、道具（川原涼、久保田煌梨、田島万那佳）

2. 題材について

私たちは、『ぐりとぐら』という絵本を選定した。この絵本の話は、野ねずみのぐりとぐらが森で大きな卵を見つけ、カステラ作りをするという話である。私たちは、カステラを子ども達の身近に感じるホットケーキに変更し、ホットケーキ作りをする事をベースに劇を行った。ぐりとぐらだけでなく、森の動物たちと一緒にホットケーキを作ることにした。森の動物たちを用いることで子どもたちも楽しくホットケーキ作りができるのではないかと考えた。ホットケーキ作りをする上での過程で、大きな卵を割る作業、ホットケーキの材料を混ぜる作業、フライパンの火をつける作業などで子どもたちと一緒に楽しく参加型でホットケーキを作ることが出来るのではないかと考えた。その中でも例えば、「コンコン」など卵を割る時の音を擬音語で用いて、子ども達に声を出してもらおうなど着席している子ども達でも協力してホットケーキを作ることが出来るのではないかと考えた。また子ども達が着席したまま身体表現を使って楽しむことができるのではないかと考えた。私たちは、主に子ども達に声を出してもらおう事をテーマに「音の森」という設定で、世界観を作った。



また、ホットケーキの材料を混ぜる作業、フライパンの火をつける作業などで、身体表現を使ってその様子を体で表現した。ホットケーキの材料を混ぜる作業では、私たちが作った歌詞に振り付けをし、私たちを見て真似をして一緒に踊る子ども達の姿が見られた。フライパンの火をつける作業では、子ども達にその場で飛んで上下に動いてもらい、火をつける様子を表現してもらった。私たちがお手本を見せることで子ども達も楽しそうに上下に大きく動いて飛んでいる姿が見られた。また、ホットケーキは、フワフワ素材にし、立体感を表した。完成したホットケーキを子どもたちの元へ運び、実際にホットケーキに触れてもらい、フワフワな感触を感じてもらった。

このような視点を想定し、『ぐりとぐら』の絵本を選定することで、子ども達との言葉でのやり取りや声を出して協力すること、身体表現を用いて体を動かして楽しむことが出来るのではないかと考え、この絵本を選定した。

(執筆者：佐藤愛奈)

3.絵本の世界から遊びへの展開

絵本の世界から遊びへの展開として、私たちはホットケーキ作りをするための過程を遊びに展開した。そのなかでもまずはホットケーキを混ぜる時やフライパンに火をつける時に身体表現を使い遊びに変えていった。そこで混ぜる時には一緒に歌いながらぐるぐる回ってもらってホットケーキを混ぜるように見せた。フライパンに火をつける時には音楽に合わせてぴよんぴよん大きく跳ねたり小さく跳ねたりして火がついていくのを遊びの展開として考え、実際に子どもたちと一緒に跳んだりしていった。また、ホットケーキの展開できる遊びとして考えたアイデアや実際に採用した遊びとしてホットケーキを巨大でふわふわに作って実際のホットケーキのように立体的に作ってそのホットケーキを森の動物たちが子どもたちのところまで運び、実際に子どもたちにその巨大でふわふわなホットケーキに触れてもらい、ホットケーキに触れるドキドキさやワクワクさ、また触ってみてホットケーキのふわふわさ触り心地などを子ども

たちに実際に感じてもらうような遊びの展開を考えた。また、実際に運んでいる時の声かけとして、ごっこ遊びの展開にできるように運んでいない他の動物たちが「ホットケーキ取ってみてね」や「一緒に食べるからホットケーキ手に持っていてね」などの声かけをすることでごっこ遊びの展開にいかたのではないかと考えた。また、取っておしまいはなく、最後に動物たちのところに運びもどして動物たちもホットケーキを手にとって最後に子どもたちも一緒にみんなでいただきますをして一緒に食べようと声をかけて、一斉に「いただきます」をして食べていくことでよりごっこ遊びに展開していくことを考えて実際に採用していった。



一緒にみんなでいただきますをして一緒に食べようと声をかけて、一斉に「いただきます」をして食べていくことでよりごっこ遊びに展開していくことを考えて実際に採用していった。

(執筆者：田島万那佳)

4.実践に際して大切にしたこと

私たちが、実践に際して大切にしたことは、子どもと一緒にホットケーキを作ることを楽しむこと。そして、子どもたちの反応を見て、その反応を大事にできるように、臨機応変に対応することの二つを考えながら取り組んだ。

子どもたちがホットケーキを作ることにわくわくできるように、大きな卵や大きなフライパンなどと、出てきた時にどんなホットケーキができるのかわくわくしながら見て、参加できるように制作物を作った。他にも、実際に卵を割る過程をしっかりと入れることによって、ホットケーキを作ることへのわくわく感、期待感を上げてもらえるように工夫した。また、ホットケーキが実際にできた時に、子どもたちにも達成感を感じ、喜んで欲しいと思い、客席を回り、ホットケーキが子どもたちの上を通り、届けられるように工夫した。子どもたちは、ホットケーキが自分の上に回ってきた時に、とても嬉しそうに笑顔で触っている様子を見ることができた。

さらに、子どもたちの反応は、予想するのが難しいし、だからこそ面白いと改めて思った。その反応を大事にする為にも、台本にアドリブの場所を増やしたり、どうしたらいいか子どもたちに問いかけた時に出た意見を実際にしてみたりと子どもたちの意見を積極的に取り入れることができるように考えた。実際にしてみて、卵を割る時にどうしたらいいか聞いた時は、自分たちが想像していた以上の反応を見ることができたので、楽しんでくれていると感じた。

実際に本番で子どもたちの前で発表してみて感じたこととして、その場ででた子どもたちの意見にしっかり耳を傾け、意見や声、身振り手振りでの表現といった子どもたちの反応を拾っていくことで、子どもたちは、自分の意見が伝わることに喜び、楽しさを感じ、より物語の世界に入り込むことができるのではないかと思った。だからこそ、子どもたちと一緒に物語を進めていくという意識は大事だと感じた。

(執筆者：中川朱里)



5.実践内容について

(1) 全体の構成

私たちは『ぐりとぐら』の本を元に「ホットケーキ作り」をタイトルにし、台本を作成した。ピアノ・ぐりとぐら・卵の黄身・ナレーションを1人ずつ、動物役(うさぎ・きつね・くま)を2人ずつ、黒子3人に分かれて作品を作った。

〈1.導入〉

幕が閉じた状態で幕の後ろでぐりとぐらが足音や声を出し、何をしているのか子どもに興味を持つようにナレーションを入れ、説明をする。ナレーションは子どもの表情や反応を聞けるように横の扉から説明をする。ナレーションが終了後、幕が開き、ピアノ(雪)が始まる。ぐりとぐらは2人で雪合戦を楽しんでいる。雪合戦を終えたぐりとぐらはお腹が空き、ホットケーキを作ろうと提案する。ナレーションはぐりとぐらのホットケーキ作りの手伝いを子どもたちに頼む。

〈2.主活動〉

ぐりとぐらはホットケーキを作るために必要な道具を探し始める。そこでまずいちばん大切な卵を子どもたちと探す。ぐりとぐらは子どもに卵がどこにあるのか問いかけ、端から端まで探す。幕の横から卵を3分の2くらい見えるように出し、子どもたちは「右!」や「反対だよー!」とぐりとぐらが卵を探せるように声で誘導する。端から見える卵の大きさを見てこれから作るホットケーキを想像し、ワクワクさせる。

【動物(うさぎ・きつね)の登場】

そこで動物(うさぎときつね)が音楽に合わせて登場し、ぐりとぐらと合流する。うさぎはホットケーキミックス、きつねは牛乳を持っている。そこでぐりとぐらにホットケーキと一緒に作ろうと提案する。動物たちとぐりとぐらは力を合わせてホットケーキを作り始める。

【材料集め】

うさぎは卵を真ん中に運ぼうと提案する。そこで音楽に合わせて「よいしょよいしょ」と掛け声をしながら大きな卵を全員で運ぶ。そこで大きな卵をどうやって割ればいいのか子どもたちと協力して考える。子どもたちの提案にぐりとぐらが反応し、ホットケーキ作りに協力していることを感じてもらう。ぐらは簡単には割れない卵を動物たちとぐりとぐらで「コンコンコン」と声を出して



割ろうと提案する。実際に「コンコンコーン」と言ってみるがなかなか割れない。そこで会場にいる子どもたちにも手伝ってもらい、全員の声の力で卵を割る。

【材料を混ぜる】

卵の殻をボウルに見立てて材料を混ぜる。材料を混ぜようとしている時に音楽が流れてくる。(手遊び「ピクニック」のホットケーキver.) ぐらはピアノに合わせて歌を歌いながら混ぜようと提案する。子どもたちにも一緒に前にいる動物たちと一緒に歌ったり、振り付けを真似したりしてもらう。

【動物の登場(くま)】

そこで2匹のくまがやってくる。フライパンを持ったくまはぐりとぐら、他の動物たちにホットケーキと一緒に作ろうと手伝いに来る。

【ホットケーキを焼く】

ぐりとぐらと動物はどうやったら火を付けられるのか困っている。そこでピアノ(「まっぼっくり」)に合わせてみんなで大きく飛んだり小さく飛んだりして火になりきろうと提案をする。ぐりとぐら、動物たちと会場にいる子どもたちにも一緒にジャンプをしてもらう。ピアノが終わり、「3・2・1」で蓋を開けると大きなホットケーキが完成している。

【ホットケーキを分け合う】

出来上がった大きなホットケーキを手伝ってくれたお礼に動物たちと会場の子も達にも一緒に食べてもらおうとぐりが提案する。まず子どもたちに分け合わせるために大きなホットケーキを実際に子どもたちの頭の上で回して触ってもらい、分け合っているような感覚にする。

【ホットケーキを食べる】動物たちもホットケーキを持ち、会場にいる子ども達も一緒に「いただきます」をして食べる。子どもたちも一緒に作ったホットケーキを食べる真似をしながら感想を伝え合う。ホットケーキを食べ終わり全員で「ごちそうさま」をする。



〈3.まとめ〉

手伝ってくれた動物と会場にいる子ども達に感謝を伝え、仲良くみんなで「世界中の子どもたち」をピアノに合わせて歌い、ばいばいをする。

(執筆者：森尾美妃)

(2) 子どもたちとの対話について

九州大谷幼稚園で行ったプレ幼教こども劇場では台本を見ながらセリフを言うこと、話を進めることに必死で全く子どもたちの反応を見ることができなかつたし、子どもたちに一緒に動いて欲しいところもあったが、なかなか動いてくれない場面もあった。そこでやっぱり子どもたちは見ているだけでは退屈になるので、物語に自分も参加している気分を味わえるようにする必要があると学んだ。

その反省をいかして本番ではしっかり子どもたちの反応を見ることが、私たちが楽しそうに演じること、「たまごどこにあるかなー?」「どうやって割ったらいいと思うー?」など子どもたちが答えやすいような問いかけを意識した。また、子どもたちが答えてくれたことをちゃんと聞いてるよと伝わるようにできるだけ子どもの目を見て会話をしたり例えば叩いてたまごを割るといった意見が出たら「たたく?やってみるね!」と実践してみるようにした。子どもたちも私たちの問いかけにたくさん答えてくれて私も会話を楽しみながら進めることが出来た。また、ホットケーキを作る時のうたでも真似しやすいような振り付けを考えたり、「森のくまさん」や「世界中の子どもたちが」などみんなが知っていて歌える曲を選び、劇中の歌でも子どもたちが参加できるように工夫した。



(執筆者：末次優花)

(3) 演出の工夫

ぐりとぐらや動物になりきるためにフェルトで耳を作りカチューシャにした。衣装もぐりぐらはオーバーオールをきて青と赤の服を着てうさぎはピンクの服、キツネは茶色の服、クマはこげ茶色の服を着て子どもたちにどんな動物たちなのかを分かりやすく表現した。プラスチックダンボールで大きなたまごを表現した。たまごを大きくすることで自分たちよりも大きいので迫力を感じられるように工夫をした。会場の人たちの声でたまごが割れるようにした。たまごにはヒビを入れていて両方から引っ張ると割れるようにした。たまごの黄身を人で表現した。割れると同時に前に飛び出たたまごが割れたことを表現した。ホットケーキの生地を作るときの歌を「いちといちで」の手遊びの歌に合わせて自分たちでアレンジをした。ホットケーキの生地を黄色の布で表現した。ふっくらした感じを表現するために黄色の布の中に圧縮袋にいれた風船を入れた。

場面の構成では、絵本に出てくるものを行い、子どもたちがそれについて理解してもらえるように構成を工夫した。子どもたちがただ見るのではなく、ホットケーキの生地を混ぜるときに身体表現で体を動かせる工夫を行った。表現では子どもたちにわかるようにおおきく動くことで一緒に動きをすることができた。

(執筆者：浦美沙咲)

(5) 言葉とセリフ

実践では、子どもたちが楽しいと思ってくれるように、興味がある物、事、を取り入れながら、参加者全員で作りを上げることを目的として一致団結して取り組んだ。子どもたちの感性を引き出しつつ、言葉や表現を通じて深いコミュニケーションを図ることを目指した。

実践の準備段階では、子どもたちが興味を持つように工夫した。特に、言葉の面白さや個性を引き出すために、セリフや表現にこだわりを出してみた。子どもたちの反応をリハーサルで見ながら、劇中で使用する道具やオノマトペ（擬音語・擬態語）を取り入れてみた。また、各キャラクターに個性的なセリフを加え、役ごとの特徴を際立たせた。

準備中や本番では、子どもたちと密接に関わりながら進めた。子どもたちの言葉に耳を傾け、子どもたちが「したいこと」を実現するよう努めた。特に、自分たちだけではできない部分を劇で演出しながら、子どもたちに手伝ってもらうことで、自然な形でコミュニケーションを深めていった。初めて会う子どもたちとも言葉を通じながら感情を引き出し、劇の雰囲気共有することが出来てみんな楽しく劇を見ることが出来たのではないだろうかと感じる。

本番では、子どもたちが積極的に関わり、劇に参加する姿が見られた。友達からも「子どもたちの声をよく聞いていた。」などの声をいただいた。子どもたちの言葉を親身に聞いてそ実践することで子ども達も本当に劇の世界にいるように感じてくれていたのではないだろうか。子どもたちと一緒に作った表現の工夫が舞台の魅力を高め、全体的に温かく一体感のある劇となったと思った。

一方で、課題も見つかった。もっと子どもたちの意見を深く取り入れ、自分の言葉で表現する力を高める必要がある。また、より多くの子どもの感情やアイデアを引き出し、反映させることが今後の目標だ。さらに、自分自身の言葉を使った子どもとの自然なコミュニケーションを心がけることで、子どもたちとより良い言葉を紡いでいきたいと考えた。

今回の「幼教こども劇場」における実践は、子どもたちとの対話を通じて、言葉の力やコミュニケーションの大切さを学ぶ貴重な機会となった。今後も子どもたちの感性、言葉、表現を大切にしていきたい。

(執筆者：梅野歩未)

(6) 動きと身体表現

幼教こども劇場を通して、動きや身体表現等に関して工夫した点がいくつかある。私たちが劇を行ったものは「ぐりとぐら」である。話の内容として、ぐりとぐらとたくさんの動物たちがみんなで協力してホットケーキを作るというものだ。

劇の内容の中で動きや身体表現等を用いたものは、まずホットケーキを作っていく段階においての過程の作業を自分たちが作った歌詞と振り付けを取り入れ、それを子どもたちと一緒にやったこと。ホットケーキを作るためには、卵を入れ、小麦粉を入れ、牛乳を入れるという工程が必要であり、それを歌にして振り付けを取り入れることで子どもたちの印象にも残りやすいのではないかと考えた。歌を聞き馴染みのあるものにするすることで、歌詞がわからない子どもたちも音楽にのって楽しむことができると考えた。実際、ステージの上から子どもたちを観察していると、歌詞はわからなくても、音楽にのりながら楽しんでくれている様子が見られた。また、歌の振り付けを出てくる材料に合った動きを用いることと同時に、いかに子どもたちが自分たちを見ながら真似しやすい動きかを考え工夫をした。実際に、子どもたちも自分たちを見ながら振り付けを真似して一緒に楽しそうに踊っている様子が見られた。このようにホットケーキを作る過程を歌にし、一緒に歌って踊って行うことでぐりとぐら、たくさんの動物たちと一緒に作っている感覚を味わうことができるのではないかと考えた。

次に、ホットケーキが完成し焼く工程に入ったときの火の表現を身体を動かし行った。表現内容として、音楽に合わせて身体を上下に動かすものだ。まず、私たちが横に1列に並びみんなが同じ上下に動くのではなく、あえてずらして上下に動くことで身体の動きを使って火を表現できると考えた。子どもたちにはそれぞれ自由に上下に動いてもらい、身体表現を楽しんでもらった。子どもたちもただ上下に動くだけでなく、例えば最初は小さく上下に動き、最後は大きくジャンプしながら上下に動くなど1つの動きに対して強弱をつけたり少しの違いを用いることで、飽きずに取り組めるのではないかと考えた。また、身体の動きに強弱をつけることで火の強弱も表現できると考えた。

このような劇で用いた動きや身体表現等をしたことで、子どもたちの楽しんでもらっている様子が見れたことはもちろん、子どもたち1人1人の身体の使い方や動かし方などの違いもさまざまあり、自分たちの新しい発見にも繋がり大切な学びの場となった。



(執筆者：沼田桃花)

(7) 音と音楽

実践ではピアノを使って音楽を工夫をした。動物がステージ上に登場してくる時にピアノを弾いて動物達の登場シーンでもポップなイメージになるようにその動物に合わせてピアノを弾いた。この物語は全体的に楽しい雰囲気で作っている時のワクワク感やホットケーキが焼けたときのドキドキ感などを感じて欲しかったため、明るい曲調でテンポ感のある曲を選択した。みんなで卵を運ぶシーンも劇場がなるべく沈黙にならないようにピアノを使って卵を運ぶだけの作業だけど、その部分でもピアノを使うことで子どもたちが飽きずに見ることができるよう工夫することができた。みんなで材料を混ぜて歌を歌う部分でもピアノを入れることで子どもたちもリズムに乗りやすく動物たちと一緒に歌うことができるのだと感じることができた。また材料を混ぜたりする工程で実際に作っている時のようなワクワク感やドキドキ感を歌とピアノで表現する工夫をした。みんなで火をつける部分でも子どもたちと飛びながら火をつける時にピアノを弾くことで飛び終わるタイミングをピアノで教えることができる部分を工夫することができた。また、出来上がったホットケーキを客席に持って行って子どもたちと運ぶシーンでもピアノを弾くことで劇場全体がポップなイメージになるように工夫することができた。最後にみんなで「世界中の子どもたちが」を歌う部分では、子どもたちもみんなと一緒に歌いやすいように歌に合わせてピアノを弾くことが出来た。全体を通して部分部分でピアノを弾くことで劇場全体の雰囲気も明るくなるし、話の流れも分かりやすくなって子どもたちも明るくなることができると学ぶことが出来た。

(執筆者：渡辺歩果)

(8) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

実際に、プレ幼教こども劇場を実践した際の、子どもたちの反応はいいとはいえなかったけれど、子どもたちはちゃんと見てくれているなというのは分かった。まず、わたしが、ナレーションとして、これから始まることに興味を持てるような声掛けをした際に、ぐりとぐらが何をしているのか、考えようとしてくれていたのではないかなと思った。それでも、私の声を通らないので聞こえづらい部分や、不安そうにしている表情から、子どもたちもよく分からないような顔をしているなども感じた。けれど、それからのぐりとぐらや、動物さんたちへの質問に対して、子どもたちは質問に対する答えを探して、ぐりとぐら、動物さんたち、みんなに伝えようとしていることが分かった。子どもたちが言ったことに対して、反応を返す、ぐりとぐらの対応から子どもたちは伝わったことを感じて、もっと伝えようとする様子を見ることが出来た。伝わったことが嬉しかったのだと考えた。けれど、音楽に合わせて「身体を動かしてね」と伝えても「嫌だ」と言っていない子どもたちは多いなと感じた。その時の反応にどのように対応したら良いのかが分からなかった。強制的にはさせたくはないけれど、しないと進まないということがあった。私たちが前で楽しく試してみることで、少ししてみようかなと思ったのか、全員ではなかったけれど、してくれる様子も見られた。この劇を通して、子どもたちが反応をしてくれることが少しでも分かったからこそ、わたしたちも子どもたちに伝えたい、楽しんでもらいたいという気持ちが生まれた。そこからの幼教こども劇場ではこうした方がいいじゃないか、子どもたちからはたぶん、こういう反応が返ってくるだろう、という考えから、たくさん試行錯誤して子どもたちに楽しんでもらいたいと楽しんでもらえる劇を作るように頑張ることが出来たと思う。



(執筆者：林春日)

(9) 取り組む過程での改善と工夫

こども劇場の取り組みは、ただ発表の場を目指すだけでなく、過程での成長やチームワークを大切にしているものだ。その中での改善や工夫について振り返る。

まず、準備段階では役割分担を見直した。最初は一部のメンバーに負担が偏っていたが、全員が主体的に取り組むため、各自の得意分野を活かした役割分担を設定した。たとえば、台本作りが得意な子には脚本を、表現力が高い子には演技指導を担当させることができた。この工夫により、全員が責任感を持って取り組む雰囲気生まれた。また、練習中には子どもの意見を積極的に取り入れることを意識した。当初は指導者側が主導しがちだったが、子どもたちが自分たちで考え、提案する場を増やした。その結果、台詞の言い回しや動きに子どもらしい創意工夫が反映され、より自然で魅力的な劇となった。製作物の準備段階では、巨大なものが必要だったため、舞台上でどのように映えるのかを確認しながら作る必要があった。どのように製作すると立体的に見えるのか、子どもたちにとってより分かりやすいのかを考えるため、メンバー全員で意見を出し合った。

その結果、視覚的に魅力的で、子どもたちも理解しやすい製作物を作り上げることができた。劇を成功させるために、裏方として多くの努力をした。まず、舞台の設営に力を入れ、照明や音響の調整を行っていた。特に、照明の色や強さを工夫し、シーンごとの雰囲気を引き立てることを心掛けた。また、衣装の管理にも注力し、役者がスムーズに着替えられるように準備を整えた。リハーサルでは、役者とのコミュニケーションを大切に、必要なサポートを提供した。さらに、舞台裏の動きが円滑になるよう、タイムスケジュールを作成し、全員が役割を理解できるようにした。

これらの努力が実を結び、劇は観客から高い評価を得ることができた。裏方としての役割は目立たないものであるが、成功には欠かせない存在であると実感した。

(執筆者：久保田煌梨、川原涼)

(10) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

本番での子どもたちの反応は凄く良かった。ぐりとぐらに卵の場所を教えようと大きな声で「あっち!」「違う右!」と言ってくれたり掴みから良かったと思う。卵を割る案を出す場面でも、「蹴る」「叩く」など予想していた案だけでなく、「ひっぱる」や「壁ごんごんってする」という大人の自分たちには思いつかなかった案まで出た。実際に割ってみる場面では大きな声で「こんこんこん」と言ってくれたり、ホットケーキの材料を混ぜる場面では、初見の歌と踊りでも何人か動きを真似してくれる子どももいた。火をつける場面では、何人か動物たちの真似をして飛んでくれたが、音楽が松ぼっくりだったのでどちらかと言えば歌っている子どもたちの方が多かったように思う。ホットケーキを子どもたちにまわす場面では、触りたい触ってみたいという様子が見えて、立体的に作って良かったと思った。強く引っ張ったりしていた子もいたが、布が取れないように針と糸で細かく縫っていたため、壊れなくて良かった。ホットケーキを子どもたちに届けている間舞台上で、「貰えた?」などの声掛けは行っていたが、子どもたちが待っている間も楽しめるような声掛けをするべきだったと思った。

反省点としては、声が聞こえにくい場面があったところ、動きが小さいと感じたところ、声掛けが足りないところが挙げられる。もっとひとつひとつのセリフと動きを大きくすればいいと思った。

(執筆者：西田和香、吉野内胡光)

5. 取り組みを通して学んだこと、得たこと

【梅野歩未】

幼教こども劇場での出来事は、子どもたちの反応がとても印象的だった。舞台から卵を客席に渡すと、子どもたちは目を輝かせながらさまざまな反応を見せてくれた。楽しそうに笑顔を浮かべる子や、興味津々で卵を見つめる子、さらにはもう食べ始めている子もいて、それぞれの個性が表れていた。客席からは「おいしい!」「たのしい!」「こっちにも来て!」といった声が次々に聞こえ、こちらが応えるとさらに会話が広がり、まるで子どもたちと一緒に物語を作っているような感覚があった。この瞬間、子どもたちがただ観るだけでなく、舞台に参加していることを実感した。特に、オノマトペを使って演じると、子どもたちの興味がより引き出されることが分かり、準備中とは違う臨場感のある劇が展開できた。近くで接することで、子どもたちがどんなことに興味を持つのかを直接感じられ、ぐり役としても非常に楽しい時間だった。この経験を通じて、子どもたちとの対話が劇をより豊かにすることを改めて実感した。

【浦美沙咲】

今回の幼教こども劇場を通して学んだことは、子どもたちの反応をしっかりと見て場面にあった対応をし子どもたちの興味を引き出すことの大切さを学んだ。練習の時は子どもがいない状況で子どもがどんな反応をするのか考えながらセリフを決めた。実際に子どもたちの反応をみると考えていたセリフとは違いアドリブで反応していた様子が多く見られた。たまごを割る時にどうやったら割れるのか子どもたちに問いかけをすると、キックや、パンチ、石にぶつけるなど色んな割り方を教えてくれた。私たちが石にぶつけて割るという意見は出なくて子どもたちの発想は様々で面白いと思った。ホットケーキとたまごを大きくして絵本の中の世界を表現した。ぐりとぐらの絵本はホットケーキを作ることがメインだからたまごを大きくすることにより非現実感があり絵本の世界に乗り込めるのではないかと思い工夫した。子どもたちの反応で印象に残っているのは最後に完成したホットケーキを客席まで持っていったことである。子どもたちは触りたくて手を大きく伸ばして触っているのを多く見ることが出来た。実際に触れたりすることでより楽しめたのではないかと思う。このような経験が出来て子どもたちの反応をしっかりと受け止め対応することの難しさを学ぶことが出来た。

【川原涼】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは声掛けは大切だと思ったことだ。自分たちが劇してて、自分たちだけで楽しむのではなく、見てくれている子どもたちと一緒に楽しむことだと思った。自分たちが今何をしていて、今から何をするのかというのを言語化することで状況が分かりやすく、子ども一人ひとりも劇にしっかりと集中出来ていると思った。また劇中に少しづつではあるがアドリブを入れて反応を見ることでもっと劇に集中できるし、自分も劇の中にいるように感じられると思った。準備の過程ではどうしたら全てが綺麗に見えるか、自分たちで持っていくにはどうやって持っていけばいいか大きさはどうすればいいか強度はどのくらいかを話し合いながら決めた。結果凄く大きくなったが見た目の割に軽く、しっかりしていたので本番手間取らず出来たので良かったと思った。また試行錯誤をして、大きい物を作っていた時に両面テープを使ったのだが、丸くなっているところは少しずつちぎりながら貼り、逆に直線のところは長く貼ると効率よく出来ると思った。実践の際の子どもたちの反応に裏方として声だけ聞いていたが凄くいい反応が聞けたと思う。リアルタイムで見れなかったのがすごく残念ではあるが、裏から演者を見ると笑っていたし沢山話しかけていたのを見るといっぱい反応してくれて楽しそうにしていたのが分かって裏からでも嬉しいなと思った。

【久保田煌梨】

今回、幼教こども劇場を通して、子どもの持つ想像力の豊かさを改めて感じる事ができた。劇場では、子どもたちが目で見えたこと、耳で聞こえたこと、そして自分の中で考えたことを驚くほど素直に発言し、表現していた。ストーリーの中で起きた面白い出来事があると、その瞬間に反応し、自分の言葉で感想を伝える姿が印象的だった。この反応から、子どもたちが受け身で劇場を楽しむのではなく、主体的に参加していることが感じられた。また、子どもたちが自由に想像を広げ、自分なりの解釈を加えながら劇場を楽しんでいる姿から、想像力が育まれる背景にある環境の重要性を学んだ。劇場の舞台装置や音楽、登場人物の表情や声色など、全てが子どもたちの感性を刺激していた。特に印象深かったのは、登場人物が何気なくとった行動に対して、子どもたちが新しい解釈を見せた場面だった。このような子どもたちの創造性が、大人には思いつかない発想や視点をもたらしてくれると感じ

た。さらに、劇場での体験は、子どもたちが集団で何かを共有することで学びや発見を深めていることにも気付かせてくれた。お互いに意見を交わし合うことで、子どもたちにとっても新たな視点や考え方を得ているのではないかと感じた。

【佐藤愛奈】

今回の幼教こども劇場を通して学んだことは、子どもたちの反応をしっかり受け取り、その場で臨機応変に対応することの大切さである。練習の時は、子どもたちが居ない為、自分たちで子どもたちの反応を想定して、練習を行うことしか出来なかった為、その為実際本番で劇を行った時に子どもたちの反応を受け取ることが出来なかった部分があった。このような事を防ぐために改善すべき点としては、練習の時に子どもたちの反応を幾つか用意しておき、幾つの場合で反応する練習やお互いに自分の台詞以外の所で毎回違う反応をするなどの工夫をして子どもとのコミュニケーションを取る練習をすることが大切だったのではないかと感じた。私たちの練習の時は、子どもたちの反応の一つや二つなどを想定で練習をしていたので、実際の本番で子どもたちの素直な反応を受け取ることができない部分があった。子どもたちは、自分の意見を伝えたい気持ちで大きな声で反応をしてくれていた為、この気持ちを受け取ることがコミュニケーションをとる上でとても大切なのではないのかと考えた。子どもたちの反応をしっかり受け止め、言葉で返すことの大切さを改めて感じた。このような点から、子どもとのコミュニケーションの取り方を改めて学びいい機会になった。

【末次優花】

今回の幼教こども劇場を通じて私はグループみんなで意見を出し合ったり協力したりすることの大変さ、楽しさを学んだ。最初は何をどうしたらいいのか分からずなかなか意見が出なくて話が進まなかったが、回を重ねるうちにみんなたくさん意見を言い合えるようになり、どうしたら子どもたちが参加できるか、楽しいと感じてもらえるかを考えるのも他の人のアイデアを聞くのも楽しいと感じられるようになり、積極的なコミュニケーションを取ることを大切さを感じた。また、会場が広い分、準備する道具も大きく作らないと客席からは見えないので大きなフライパンやホットケーキを作るのが大変だった。それと同時に台本も完成させる必要があり、役割分担と、グループでの協力が必要不可欠だと改めて感じる事が出来た。これから保育士になる上でお遊戯会や運動会など様々な行事がある。そこでこの経験をいかしてこれからも積極的なコミュニケーションと、協力を大切にしていこうと思った。

【田島万那佳】

今回の幼教こども劇場を通して、子どもたちの反応や想像力を見ながらどのような声かけをしていくのかやどのように子どもたちの興味を引き出しながら動いていくのかを学んだ。練習をしていく中で私は道具として活動をしていたが一つひとつの場面で子どもたちがどのような反応、動きをしているかを考えながらしていたが本番では子どもたちの想像力でたくさんの声を出してくれたり体を動かしている様子が見られた。卵が出てくる時にも子どもたちは即座に「卵出てきたよ」やぐりとぐらに「卵右にあるよ」などと子どもたちから反応している様子が見られた。そこから劇はどんどん進んでいきホットケーキを混ぜる時には子どもたちも一緒に歌って混ぜている様子も見られ、フライパンに火をつける時でも上下にぴよんぴよん跳んでくれていて、子どもたちは「火ついたかな」や「もっと跳んで」などの声が聞こえてきて子どもたちもついてるのかなやどうなるかななどのワクワク感が出ている反応があったと気づいた。ホットケーキを子どもたちのところに運ぶ時に「ホットケーキきた！」や「私も触りたい」などと声を出して楽しんでいる様子が見られ、おっきなホットケーキに子どもたちはワクワクしたり、触りたいと思い必死にホットケーキを触りに行こうとする様子や立ってホットケーキをポンポンさせたりしている子どもたちもいた。子どもた

ちのワクワク感や楽しみなどの反応がよくみれたと気づくことができた。幼教こども劇場を通して、子どもたちの想像力の豊かさや反応をしっかり受け止めながらそのことに反応したり、声かけをしていくことの大切さや子どもたちの楽しいやワクワクしてるやどうなるんだろうなどのたくさんの気持ちを受け止めることそしてそれをどう表現して展開にしていくのかの大切さを学ぶことができた。

【中川朱里】

今回の幼教こども劇場を通して、子どもたちの興味の引き出し方や子どもたちの反応をしっかり見て聞くことについて学んだ。プレ実践で、子どもたちの前でした時に、台本通りに進めていくことに集中してしまって、子どもたちが呟いていたり、身振り手振りしたりしてくれていた、子どもたちの反応を見逃してしまっていた。そのプレ実践での反省を活かし、本番では、しっかり子どもたちの反応を見てできるように、どういう流れで進めていくのか、子どもたちに意見を言ってもらえるような場所をつくることを意識して考えた。また、ホットケーキを作ることを子どもたちがわくわくして楽しめるように、制作物を大きくした。卵やフライパンを大きくして、どんなものができるのか想像して楽しめるように工夫した。実際に子どもたちの前で試みて、卵が出てきたら、楽しそうに場所を教えてくれたり、卵の割り方を聞くと一生懸命考えてくれたりしていた。最後にできたホットケーキを客席に持っていくと、子どもたちは触りたいと一生懸命手を伸ばして楽しんでいる様子を見ることができた。この幼教こども劇場を通して、子どもたちの反応をしっかり見るということを大切にしていきたいと思った。

【西田和香】

今回のこども劇場では、子どもたちも私たちも楽しめる劇を作ることが出来たと思う。ひとつの絵本からこの場面はこういうことが一緒に出来るんじゃないかとみんな考え、実際にやるにはどのくらいのスケールにしなければいけないのか、大変だったが楽しかった。本番の子どもたちの反応を想像しながら準備をしていたが、予想以上の反応で喜んで貰えたことがとても嬉しかった。中でも卵を割る場面でどうやったら割れるか子どもたちがたくさん意見を出してくれたことが印象に残った。序盤の場面なので反応してくれる子どもたちが多く安心した記憶がある。くま役をしたが、重そうにフライパンを運んだり、美味しそうなホットケーキが出来たことを伝えたり、セリフの数は少ない分大きな声を出すように心がけた。ただ動きをもっと大きくするべきだったと思った。プレとは全く違うことを本番でやったのでどんな反応をしてくれるか不安はあったが、子どもたちの楽しそうな様子が見れて良かった。今回の経験は実際の現場でも活かしていきたい。

【沼田桃花】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、チームでの協力や意思疎通、活動において子ども主体に考えることの大切さである。準備の過程では、最初はチームが意思疎通できていなかった部分もあり、大道具などにおいて曖昧な部分もいくつかあった。だが、放課後チームのみんなが残って道具を作ったり、劇をよりよいものにするための話し合いを重ねたりなど幼教こども劇場が近づくにつれ、1人1人が協力し、意思疎通までしっかりできているように感じた。幼教こども劇場のようなチームのみんなですべての目標を達成することにおいて、協力や意思疎通は欠かせないものだと考える。また、劇の内容においてセリフや流れなどを最初は台本どおりに進めていかなければいけないという気持ちが強く、リハーサルときは子ども主体というより、台本主体になっていたように感じた。そこで、どう子どもたち主体で楽しめるかを考えた。例えば、卵を割る場面では子どもたちのたくさんの意見を聞いてそれに合った言葉を返したり、動きに変えるなど

臨機応変に進めていくことができ、子どもたちの声をよく聞けていたと感じた。実践の際の子どもへの反応に楽しんでくれていることが伝わってきて安心する気持ちと同時にたくさんの学びや経験、知識を得ることができた。

【林春日】

今回の幼教こども劇場を通じて、子どもたちは、こんなにも反応してくれて、こんなにも楽しんでくれるんだなと思った。私の1番、印象に残っているのは、まだ、こども劇場が始まる前に「すごく楽しみだね」と子どもたち同士で話していたことだ。それを聞いて、とても嬉しかった。子どもたちは、私たちの1つひとつの動作をよく見ていて、その動きで、次何するのかと考えていたように感じた。そして、その動きの意味を見つけて、全てに全力で、応えていたし、楽しんでいる様子が良く分かった。想像力もあって、たくさんの考え方があってとても面白かった。そこで、子どもたちの考え、想像がもっと膨らむような言葉掛けが大切で、私たちの考えているルールの上を行かせるのではなく、そこから外れたと思っても、子どもたちの考え方に合わせて、ルールを敷いて続けていけるような、私たちが、もっともっと見え方の広がるような対応を学んでいかなければいけないなと思った。このことから、子どもたち主体となる保育が子どもたちのいろんな考え方を広げていけるのだなと改めて思った。子どもたちの1つひとつの言葉を取り残さずに受け止めて行くことが大切だと学ぶことができた。

【森尾美妃】

今回の幼教こども劇場を通して2つのことを学ぶことが出来た。1つ目はグループ内でのコミュニケーションの必要性を感じた。改善点の多さと時間がないことに焦り、グループ内でのコミュニケーションが減ってしまうこともあった。しかし納得できない部分があった場合はその度に何度も話し合いをし、1人1人が納得した形で本番を終えることが出来た。コミュニケーションをとることで自分達が絵本を通して子どもたちに何を伝えたいのかを見直すことが出来、グループ内で伝えたい事を統一することにも繋がり、1人1人が自分の役割に責任を持ち最後までやり通すことができたと思う。グループで活動を行うときにはコミュニケーションは欠かせないものだと改めて学ぶことが出来た。2つ目は客観的に課題点を見つけ改善することを繰り返すことの必要性を感じた。今回の幼教こども劇場では子どもを対象としたものだった。どうしたら劇のように見せ物にするのではなく、子どもとの対話を第1に考えつつ、「ぐりとぐら」という絵本の世界観を崩さずに活かすことが出来るのかを考え、何度も台本や全体の構成の修正をした。「見ただけで物語の内容が分かる」「物語が分からなくてもワクワクする」を目標に何度も練習を行い、伝わりにくいところは改善することを繰り返した。また子どもとの対話の中では全てをセリフにするのではなく子どもがその場で言った事を実践することに挑戦して子どもが登場人物たちと一緒にホットケーキを作っているような感覚を味わってもらうことが出来たと思う。全体を通して絵本の中の物語を生かしつつ自分たちの身体や声を使ってホットケーキ作る工程にあてはめていくか、子どもたちがどうしたら最後までワクワク感を無くさず、飽きずに最後まで楽しんで見られるようになるのか考えることはすごく大変だったけれど1つ1つにこだわりを持つことで会場にいる子どもたちのワクワクを引き出すことに繋がったのではないかと思う。この経験を今後、保育の場に入った時に活かして実践し、学びを深めていきたいと思った。

【吉野内胡光】

今回のこども劇場を通してグループで劇を作り上げるために必要なことや大変なことなど沢山経験し、学ぶことができた。準備の中で一番の反省点としてはグループ内での情報共有が出来ていなかったところだと思った。劇の台本を作る際、台本係やその周りにいた人たちの中では流れが理解できていても他の人には言葉で伝えないと伝わっていない部分があっ

た。そのため材料や道具を作っていく中でのすれ違いなどがあつた。準備をしているときには自分のことで精一杯で周りの人の立場に立つことができていなかったことが振り返りをして改めて理解出来た。

グループで作業を進めていくためには情報共有と周りへの気配りが大切だと学べた。本番では自分たちが想像していた子どもたちの反応以上に子どもたちがたのしく参加してくれていたと感じた。リハーサルのなかで子どもたちが反応しにくいと感じていた場面でも大人には思いつかない子どもたちの発想が次々に飛び交い想像以上だった。どのようにしたら子どもたちが参加したい、手伝いたいと思えるのか子どもたちの立場にたって考えることは難しかったが、今回のこども劇場や準備の中で得た学びや発見を忘れずに今後の保育にも活かして行きたいと思った。

【渡辺歩果】

今回の幼教こども劇場を通して、絵本の話をもとに1から自分たちで考えることが初めての体験だった。グループのみんなと一緒に台本から会話から動物の役割を自分たちで考えることができた。話の流れに沿って会話を考えることが難しかった。ただステージ上で会話をするだけではなく、動物たちが登場するシーンで客席の後ろから登場してくることで子どもたちや見ている人達に印象を与えることができた。劇場が大きいので、1つひとつの材料の小道具を少しでも大きく作ることでみんなにインパクトを与えることができた。ホットケーキをみんなで作るにあたって、子どもたちに材料をきいたりして臨機応変に対応することでアドリブで動物たちの会話を楽しむことが出来たと思う。自分たちだけで劇を進めていくのではなく、見ている子どもたちと一緒に話を進めていくことを大切にすることができた。子どもたちに実際に質問をしてきいたり、不思議とぐりとぐらの絵本の世界に吸い込まれるような会話を考えたり、しぐさや内容を進めていくことが出来た。劇場で動物たち同士でも会話をすることで世界観に吸い込まれることができたと感じた。自分自身が実際に現場に立って劇をする場面があつたら、自分たちだけでなく、見ている人たちと一緒に作品を作り上げていくという事を重点的に考えていきたいと学ぶことが出来た。